

# 中古語における引用表現「…とあり」 について

辻 本 桜 介

## 1. 問題の所在

中古語では「…とあり」という形で言葉を引用する表現がしばしば用いられる。

- (1) 空の色したる唐の紙に、「わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど いつも時雨は」とあり。(源氏・葵・2-57)
- (2) 一日、見奉りしかば、対の簀子にて、宮を抱き奉り給へりしに、宮の君、『まろも、まろも』とありしを抱き給ひしに、うち見上げて立給へりしを、…。(宇津・楼上上・842)

現代語の「…とある」の場合、(1)のように書かれた文字を引用する言い方は可能だが、(2)のように発言内容を引用する言い方は用いられない。

- (3) 買い物メモに、「焼酎，紹興酒，ビール1ケース」とある。
- (4) \*転んだ幼児が、「膝が痛いよ」とあった。

管見の限り、中古語の「…とあり」に関する本格的な調査は行われていない。(1)と(2)は文脈から書記内容の引用、あるいは発言内容の引用と解されるが、両者に文法的な相違は無いのか。あるいは他の種類の言葉を引用する用例は無いのか。「あり」は、事物が存在することを表す本動詞的な用法の他に、形容詞や助動詞の連用形語尾に付いて補助活用を作る用法もあるが、「…とあり」における「あり」はそのどちらの性質を持つ

のだろうか。

「…とあり」に言及する先行研究としては伴（1960）・山口（2000）などが管見に入ったが、それらを参照しても上述の疑問点を解消するには至らない。

伴（1960:168）は蜻蛉日記に見られる「…とあり」について、「〔あり〕を用いているのは、兼家、父、宮などであり、作者の場合に、「あり」を用いているのはごくまれである」と指摘する<sup>(1)</sup>。語り手本人の言葉を引用することができないという指摘は注目に値するが、他作品でも同じことが言えるかどうかは不明である。

山口（2000:175）は「古代語では「言ふ」などの限定された言い方の代理として慣用される度合いが高い」とするが、「〔言ふ〕などの限定された言い方」とは、何の中でどう限定されているというのだろうか。また、「代理」というのも、おそらくは「あり」と「言ふ」とを文法的に同価値の要素と見做す考えなのであろうが、特に根拠は示されない。加えて、「代理」のように解せる用例が「慣用される度合いが高い」とされるのは、具体的な数量としてはどうなのか、また「言ふ」以外の解釈が当てはまるものの状況はどうなっているか、といった重要な点についても、きちんとした調査結果は示されない。

要するに、「…とあり」については基礎的な調査と用法の記述が行われなければならない段階にある。以下でそれを実践したい。

## 2. 調査の概要

本稿末に示した中古語の主な和文資料から、「…とあり」の用例を網羅的に抽出したところ、695例得られた。その全例を観察したところ、意味的観点から以下の①～⑧に分類できた。

---

(1) 大木（1975:19）にも同様の考えが示されている。

## ①書記内容（手紙・和歌）

書かれた言葉を引用するもので、最も用例数が多い。

- (5) 姫君の御文には、「〈今日のみ〉と聞きはべれば、〈何心地せむ〉となむ。惜しめどもしひて行くだにうきものをわが心さへなどかおくれぬ」とあり。(落窪・四・331)
- (6) …、帰らせたまひぬるのち、ありつる御文見れば、われゆゑに月をながむと告げつればまことかと見に出でて来にけり とぞある。(和泉・38)

## ②発言内容

書かれた言葉ではなく、発声された言葉を引用すると解されるもの。

- (7) 御方は南の殿におはするを、「かかる御消息なむある」とありければ、忍びて渡りたまへり。(源氏・若菜上・4-118)
- (8) …のたまひ知らせ給ふに、御車よせて、「姫君わたり給ふ」とあるを、うち聞きつけたるは、…(寝覚・五・337)

## ③書記内容か発言内容かが曖昧なもの

引用された言葉が書記内容なのか発言内容なのかはつきりしないもの。使者を介しての伝言などが多いようである。

- (9) 十五夜の夜、三日にあたるに、その夜、内裏より、大将殿に、「その婿たち率て参れ」とあり。(宇津・沖白波・448)
- (10) 桂の院に渡りたまふべしとありければ、近き御庄の人々参り集まりたりけるも、みな尋ね参りたり。(源氏・松風・2-441)

## ④呼称

人名・職名が引用されるもの。特定の発話主体を想定できない。

- (11) その日のつとめて、はかず奏せさせて、源氏参らせ給ふ。この源氏の名は、涼となむありける。(宇津・吹上下・283)

- (12) 左の頭には、絵所別当藏人少将濟時とあるは、小一條の師尹の大臣の御子、今の宜耀殿の女御の御兄なり。(栄花・一・上-50)

#### ⑤ 噂・一般論

一般に言われていることが引用されるもの。特定の発話主体を想定できない。

- (13) さるものから、世のおほえ重しとある人なれば、いささかに、僻みたる心遣ふべうもあらざめり。(宇津・国譲上・653)
- (14) いどもの狂をしき事にこそ候へ。よろづ誰々とありとも [=東宮妃の候補は誰々などと噂されているも]、殿の御心より外にあべい事にも侍らぬに、…(栄花・二十六・下-230)

#### ⑥ 作品の一節

古典などの文句を引用するもの。出典作品の文字列を引用する点は①に類似するが、引用内容は引用者の記憶の中の言葉であって、引用者の手元にある書面の文字列ではない。読者一般に知られた作中の文句を提示すると解される点で⑤に近い。

- (15) 御返りに、「いと夜深くはべりける鳥の声は、孟嘗君のにや」と聞えたれば、立ち返り、「[漢籍に]『孟嘗君の鶏は函谷関をひらきて、三千の客わづかに去れり』とあれども、これは逢坂の関なり」とあれば、…(枕・一三〇・245)
- (16) さて五日が程いみじうあはれに尊し。講師達、中々心のどかなるところにて、尊くあはれに仕うまつる。[金光明最勝王経に]「十千の魚、十二部経の首題の名字を聞きて、皆利天に生れたり」とあり。況んや五日十座の程、講ぜられ給ふ法花経の功德、いみじう尊し。(栄花・十九・下-114)

⑦思考内容

文脈的に、発言内容よりも思考内容と解するのが自然なもの。

(17) … [兼家から頼まれた縫物に手を付けずそのまま] 返しやりつるもしるく、ここかしこになむもて散りてする [=あちこちに頼み分けて仕立てている] と聞く。かしこにも、いと情なしとかやあらむ、二十余日おとづれもなし。(蜻蛉・上・110)

(18) 里にも、え避らぬ [=女二の宮のそばを離れない近親者]、『[女二の宮を] 人知れず盗まむ。入らむ』とのみあなれば、それに

表 1 用例分布 (「…とあり」695 例の分類)

	①書記内容 (和歌・手紙・ 書記内容)	②発言内容	③書記内容か発言内容 容かが曖昧なもの	④呼称	⑤噂・一般論	⑥作品の一節	⑦思考内容	⑧不明	合計
竹取物語	2								2
伊勢物語	1								1
平中物語	17	1					1		19
土佐日記	1								1
落窪物語	25	3	4						32
蜻蛉日記	63	32	19				1		115
大和物語	46	2	3						51
宇津保物語	63	18	40	1	2	1	3	2	130
枕草子	11	3	2		1	1		1	19
源氏物語	88	14	16		1				119
紫式部日記		3	2						5
和泉式部日記	43	2							45
夜の寝覚	7	4	5				1		17
浜松中納言物語	7	4	1			1	1	1	15
更級日記	2	3	4			1			10
栄花物語	33	20	41	4	4	2		1	105
堤中納言物語	5	3					1		9
合計	414	112	137	5	8	6	8	5	695

怖ぢて、[女二の宮の母である仁寿殿の女御は] えまかで給はぬぞや。(宇津・国譲下・804)

表1はそれぞれの用例数を集計した結果である。発言内容を引用すると解される②の用例が一定量得られるのは、現代語の「…とある」と大きく異なる点である。④～⑦は用例数が少なく、派生的な用法かと思われる。以下、この分類を用いて分析を進めていく。

### 3. 現象の記述

本節では得られた用例の文法的な特徴を記述する。

#### 3.1 意味的観点

最初に、用例が一定量得られた①～③の意味について考えたい。

全体を見ると、書記内容を引用する①が多い。従ってこの意味での使用が中心となっていることは確かである。しかし、それだけで安易に「あり」を「書く」等に相当する代用動詞であるとか、「言葉が存在するの意」<sup>(2)</sup>の動詞であると断ずるのは早計である。詳細は3.2, 3.3で述べるが、「…とあり」の「あり」は補助活用の振る舞いを示す点で自立語相当とは見なしにくく、また主格成分に人物を表す名詞が現れる点から見て、「言葉が存在する意」のように言葉を主体と見るような考えも適当とは思われない。

①は広くさまざまな書記内容を引用できるが、書記内容を引用する典型的な表現である「…と書く」と比較すると、どんな言葉も無制限に引用できるわけではないことが分かる。すなわち、①において引用される書記内容は、主節時における出来事や書き手自身の態度が描写されたものに限られるようで、次のような、主節時と切り離された情報（歌題、漢字の表記

---

(2) 『日本国語大辞典』（第2版）の記述。

法、歌合の参加者名の一覧など)を引用した用例が見出せない。

- (19) かくて、御遊び始まりて、朱雀院、「老いせる春を弄ぶ」と、歌の題に書かせ給ひて、嵯峨の院に奉り給へば、…(宇津・国譲下・819)
- (20) いたどりはまいて、虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顔つきを。(枕・一四八・274)
- (21) [歌合の] 右方は実経朝臣・兼房中宮亮・資通の弁・俊家の中将・通基の四位侍従・師経内蔵頭・行任・拳周・為善・国成・良宗の右衛門佐・資綱少将・経家少納言・経季左衛門佐・参河守経信・定季信権守、倉人は茂清・家任・頼家とかかせ給て、…(栄花・三十二・下-374)

①を単純に「書かれた文字の引用」に過ぎないものと見るわけにはいかないだろう。なお、主節時と切り離せない内容の言葉を引用するものであるという点は、①だけでなく②③にも見出せる特徴である。

②も一定量の用例が得られる。引用される言葉が書記内容であるか発言内容であるかの解釈は文脈に依存し、判断しがたいもの(③)も多いが、書記内容を引用する①の場合、次のように筆記媒体や文字のあり様を描写する成分が共起した用例が得られるのに対し、発言内容を引用する②の場合、発言のあり様を描写する成分<sup>(3)</sup>が共起した用例は見出せない。

- (22) …、かの君の御手にて、妹背川すまずなりぬる宿ゆゑに涙をもなほ流しつるかな とあるを、「あはれ」と見給ひて、…(宇

---

(3) 発言を表す典型的な形である「…と言ふ」の場合は、次のように連用修飾成分(波下線部)が共起して発言の物理的なあり様を描写することがありうる。

- (i) 内に、いと貴なる声にて、「かれ呼び給へ。かの君は、いづちぞ。あな見苦し」と言へば、「おはしませ。おはしませ」と言へども、聞かず。(宇津・楼上上・830)
- (ii) 「いかなれば花に木づたふ鶯の桜をわきてねぐらとはせぬ春の鳥の、桜ひとつにとまらぬ心よ。あやしとおぼゆることぞかし」と口ずさびに言へば、いで、あなあぢきなものあつかひや、さればよ、と思ふ。(源氏・若菜・上・4-146)

津・蔵開下・614)

- (23) …「これ、公任の宰相殿の」とてあるを見れば、懐紙に、すこし春ある心地こそすれとあるは、…(枕・一〇二・209)
- (24) 仮名はまだ書きたまはざりければ、片仮名に、「契りあらばよき極楽にゆきあはむまつはれにくし虫のすがたは 福地の園に」とある。(堤中・414)

このことから、発言内容を引用する②の「…とあり」は、発声という行為の物理的なあり様を描写しないものと考えられる。発声という行為がなされたことは前後文脈から読み取れるにすぎず、「…とあり」自体の語彙の意味として備わっているわけではないのであろう。となると、発言内容を引く②の「…とあり」は、「…と」に引かれる言葉を発しているような様子を意味するのではないか。③のような用例が一定量出てくるのも、この曖昧さによって書記内容か発言内容かで解釈が揺れるためだと考えられる。

書記内容を引用する①の「…とあり」は、筆記という行為の物理的なあり様を描写する点で、②と区別すべきものである。詳細は3.2で述べるが、このことは格成分との共起の仕方からも支持できる。

なお、③のように書記内容か発話内容かが曖昧な用例が多くあることは、①と②を別の用法とする見方を否定する根拠にはならない<sup>(4)</sup>。

### 3.2 形態

次に指摘したいのは、形態面において「…とあり」が形容詞の補助活用やラ変型の助動詞と同様の文法現象を示すという点である。すなわち、次の2つの事実を挙げることができる。

1つ目は、テ形が存在しないという点である。これは形容詞の補助活用やラ変型活用の助動詞と共通した特徴である。

- (4) たとえば「花子と太郎に会う」における「と」が並列 (and の意) を表すか共同動作の相手 (with の意) を表すかは曖昧だが、こうした用例が日本語において無数に見られるからといって、「と」に関して、並列を示す用法と共同動作の相手を示す用法とが区別不能であるということにはならない。

表2 「…とあり」に後接する助詞・助動詞

格助詞または接続助詞 (91 例) ※いずれであるかの判断は保留		ヲ	70		
		ニ	21		
接続助詞 (204 例)	未然形接続	バ(仮定)	13		
		ニツケテ	2		
	連体形接続	ホドニ	2		
		ト	36		
	已然形接続	トモ	5		
		ドモ	1		
バ(確定)		124			
係助詞 (21 例)		ハ	17		
		モ	4		
終助詞 (5 例)		ゾ	3		
		モノカ	1		
		ヤ	1		
助動詞 (185 例)	未然形接続	態	ス	1	
			極性	ズ	2
		連体形接続	法	ム	7
				ジ	1
	メリ			17	
	伝聞ナリ			3	
	連用形接続	時制	ベシ	1	
			ケム	4	
			キ	43	
			ケリ	89	
		相	ツ	18	

表3 「…と」と「あり」の間の介在要素

(係助詞等+) 連用修飾成分	連用修飾成分	4
	ノミコソハ+連用修飾成分	1
	バカリ+連用修飾成分	3
係助詞	カ	5
	コソ	5
	ゾ	40
	ナム	37
	ハ	3
	モ	2
	ヤ	3
係助詞+係助詞	カヤ	1
副助詞	サヘ	1
	ダニ	2
	ノミ	23
	バカリ	7
副助詞+係助詞	ダニモ	1
	ノミゾ	1
	ノミナム	3
介在要素なし		553

表2で、「…とあり」に後接した助詞・助動詞の種類と用例数を示した。一見して「…とあり」に対する助詞・助動詞の後接は自由なようであるが、接続助詞に着目すると、連用形接続のものが1例も無い点に注意される。連用形接続の接続助詞としてはテ・ツツ・ナガラなどが挙がるが、このうちツツ・ナガラは引用句「…と」を伴うか否かに関わらず「あり」に後接する用例が少ないので問題にならないとしても<sup>(5)</sup>、テは次のように

(5) 国立国語研究所 (2021) 『日本語歴史コーパス』 (バージョン 2021.3 <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>) の平安時代編 (大鏡と讃岐典侍日記は除く) によって検索した結果では、「ありつつ」は7例、「ありながら」は16例のみであった。

「あり」に付く用例が決して少なくない<sup>(6)</sup>。

(25) さはることありて、なほ同じところなり。(土佐・一月八日・24)

(26) ある人ありて、「これなむ檜垣の御」といひけり。(大和・一二六・347)

「…とあり」に対して全くテが後接しないのは、強い制約である。これは、形容詞の補助活用において「…かりて」という形が無いことや、ラ変型活用の助動詞において「べかりて」「まじかりて」等の形が無いのと同様である。形容詞やラ変型活用の助動詞の場合、「…くて」「べくて」「まじくて」のように本活用の「く」語尾にテが直接付いた形がテ形を担うが、「…とあり」の場合、トテがそれに相当するものと見られる。

2つ目は、「…と」と「あり」の間には基本的に係助詞と副助詞しか割り込めないという点である。

表3で、「…と」と「あり」の間に介在した要素の種類と用例数を一覧にした。これによって、「…ともあり」や「…とのみあり」のように係助詞と副助詞が介在することはありえても、他の成分が介在することは殆ど無いという事実を指摘できる。「…と」と「あり」が緊密に繋がって、他の成分の介在を許さなくなっていると考えるべきであろう。形容詞の補助活用や助動詞のラ変型活用も、次のように係助詞・副助詞が割り込むことはあっても成分レベルの要素が割り込むことは無い。

(27) …、大臣は、人よりまさりたまへとしも思さずなむありける。

(源氏・滯標・2-302)

(28) 世の常のことこそあれ。(蜻蛉・上・98)

(29) もの騒がしくのみありて、思ひいたらぬこともあらむを、…

(源氏・若菜下・4-206)

(30) …かぐや姫のかたはらに寄るべくだにあらざりけり。(竹取・63)

「…とあり」において連用修飾成分が介在した次のような用例もわずか

(6) 注(5)の調査結果では、「ありて」は426例得られた。

に見られるが、全体の母数を考慮すると例外的であり、中古語の標準的な形と認めることは難しい。あるいは、(32)における「と」は「いささかにて」を述語としてそこに係っている可能性もあり、一部の用例はこれと同様に別の構造を想定すべきかもしれない<sup>(7)</sup>。

(31) 二日ばかりありて、ただことばにて、「侍らぬほどにもものしたまへりける、かしこまり」など言ひて奉れて後、「いとおぼつななくてまかでにしを、いかで」とつねにあり。(蜻蛉・下・330)

(32) 尚侍の君の御返りには、「浦にたくあまだにつつむ恋なればくゆる煙よ行く方ぞなき さらなることどもはえなむ」とばかりいささかにて、中納言の君の中にあり [=中納言の君からの返事に尚侍の君の返事も同封してある]。(源氏・須磨・2-192)

念のために言えば、他の成分が介在しにくいことは引用句「…と」と係り先の発話動詞等の中で必然的に生じる現象ではない。たとえば「…と言

(7) 表2で「連用修飾成分を含む」とした他の用例も全て挙げて見ておくと、まず次の(i a, b)は、それぞれ「あり」ではなく波下線部に係っている可能性がある。

(i) a. 御返りは、「…あなかしこ」と、すくよかに、白き色紙のこはごはしきにてあり。(源氏・宿木・5-423)

b. …「…若々しく」とばかりほのかにぞあめる。(源氏・螢・3-204)

これらは、次のように引用句「…と」が書記媒体や引用語句の量的側面を表す述語に係っていく構造としても解釈できるので、「…とあり」の確例とは言えないかもしれない。

(ii) a. はしがきに、「…思ひやりきこゆることまさりてなん」と、白き色紙にて立文なり。(源氏・浮舟・6-159)

b. 「数ならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかく根をとどめけむ」とのみほのかなり。(源氏・玉鬘・3-124)

残りの4例は次のものである。このうち(iv)~(vi)は中古においてもやや時代の下った頃の用例であり、後世に起こる何らかの変化の兆候と見るのが良いかと思われる。

(iii) …この頃も、『とく参り給ひね』とのみこそは、度々ある御文を見れば、あめれ。(宇津・蔵開上・494)

(iv) 「とくわたらせ給へ」と、せめてたびたびあれば、…(浜松・三・296)

(v) …、和泉「昔恋しければ、見奉らん。渡し給へ」とあからさまにありければ、…(栄花・二十七・下-250)

(vi) …、「参らせ給へ」と常にあれど、…(栄花・三十七・下-475)

ふ」等においては次のように格成分や連用修飾成分が介在しうる。

(33) ものへ渡りたまふべかなりと仲信が言ひつれば、おどろかれつ  
るままに出で立ちて。(源氏・浮舟・6-123)

(34) こだにかくあくがれ出でば薫物のひとりやいとと思ひこがれむ  
と忍びやかに言ふを、屏風の後ろにて聞きて、…(堤中・339)

以上の点から、「…とあり」は引用句「…と」に補助活用を作る「あり」が後接したものと考えられる。

従来からの常識的な理解に基づけば、補助活用を形成する「あり」は、存在を意味する動詞「あり」とは明確に異なった性格を有しており、両者は区別する必要がある。たとえば時枝(1954:112)は補助活用の「あり」について「もはや詞としての「あり」ではなく、陳述を表現するもの」とし、春日(1960:362)もやはり補助活用の「あり」を「接続の機能を補助する」ためのものとし、後続する助動詞等へ接続することを目的とした形式であると説く。「…とあり」における「あり」も、引用句「…と」を接続助詞や助動詞へ接続させたり、文末で述語として働けるように補助的に添えられたものと見られ、自立語の「あり」とは異質のものと考えられる必要がある。

なお、形容詞の補助活用などでは連用形の「く」語尾に補助活用を作る「あり」が緊密に結び付いた結果として音縮約が起きているが、「…とあり」の場合は音縮約によって「たり」という形へ変容することなく「とあり」という形態を保っている。これは、先に成立した断定の助動詞タリとの衝突を避けるためではないか、と思われる。

### 3.3 構文的観点：格成分の取り方

続いて、共起する格成分の種類を観察する。

表4では、「…とあり」と共起した格成分の種類と用例数を示した<sup>(8)</sup>。

(8) (38)のように2つ以上の格成分が生起している場合、それぞれを1例として集計した。

表4 「…とあり」と共起する格成分

共起する格成分		①書記内容(手紙・和歌)	②発言内容	③書記内容か発言内容かが曖昧なもの	④呼称	⑤噂・一般論	⑥作品の一節	⑦思考内容	⑧不明	合計
格(意味役割)	標示形式									
主格(発話者/手紙の書き手)	ノ	1	4	6						11
	ニ	1		1				1		3
	φ	22	6	4						32
起点格(伝言や手紙の発信元)	ヨリ	9	2	3						14
着点格(伝言や手紙の受信者)	ニ	7		3						10
場所格(手紙等の筆記面)	ニ	30					2			32
	ニテ	1								1
場所格(複数の発話者)	ニ		1							1
具格(筆記媒体)	ニ	1								1
	ニテ	6								6
対象格	ヲ			1				1		2
合計		78	13	18	0	0	2	2	0	113

基本的に、格助詞の付いた名詞の用例のみを集計してあるが、主格名詞に関しては無助詞のもの(φ)も集計した<sup>(9)</sup>。④～⑧は殆ど用例が得られなかったので考察の対象外とし、①～③について考える。

まず①～③に共通する特徴としては、言葉を表す名詞ではなく人物を表す名詞が主格に立つ点を挙げたい。

(35) そのほど過ぎて、親族なる人のもとより、「昔の人の、[[かばねたづぬる宮』という物語を] かならずもとめておこせよ、とあ

(9) 次の(i)のように「(御)返し」が「…とあり」の直前に現れることがしばしばあり、主格に立つように見えなくはない。しかし格標示のある用例を探すと(ii)のように二格で現れていることから、(i)のような「返し」が格成分であるとするならば、二格相当であると見られる。

(i) …「あるままにこそは」といへば、返し、濡れかへりせかれぬ水脈にひかれてぞわれさへ浮きて流れよりけむとあるに、…(平中・二・459)

(ii) …とありければ、御返しに、草枕ちりはらひにはからころもたとゆたかに裁つを待てかしとあれば、…(大和・一四〇・357)

りしかばもとめしに、そのをりはえ見出でずなりにしを、今しも人のおこせたるが、あはれに悲しきこと」とて、かばねたづぬる宮といふ物語をおこせたり。(更級・306)

- (36) されば、少将、散りぬればくやしきものを大井川岸の山吹今日さかりなり とありければ、[帝は] いたうあはれがりたまうて、急ぎおはしましてなむ御覧じける。(大和・一〇〇・322)

この点は、主格名詞と共起しにくい現代語の「…とある」と明確に異なっている。

- (37)??先生は黒板に「本日は自習」とあった。

次に①において確認できる特徴として、主格以外の格成分もしばしば共起するという点が挙げられる。

- (38) この相任本かしはの所より、中納言君に、煙せぬみ山おろしの悲しさに雲の林はたちやそひけん とあれば、ありとてや人はとふらん送りおきし靈の夜殿にそひにし物を とぞありける、理とぞありける。(榮花・二十五・下-191)

- (39) されば、車に乗りはてむを見むはいみじからむと思ふに、家より、「とく渡りね。ここにもものしたり」とあれば、車寄せさせて乗るほどに、ゆく人は二藍の小桂なり、とまるはただ薄物の赤朽葉を着たるを、脱ぎかへて別れぬ。(蜻蛉・上・138)

- (40) まだしきに、助のもとに、「みだり風おこりてなむ、聞こえしやうにはえまらぬ。ここに午時ばかりにおはしませ」とあり。(蜻蛉・下・348)

これらのように起点格名詞・着点格名詞が共起する用例からは、「…とあり」が方向性のある動きを表すことが分かる。

一方、場所格名詞が共起する次のような用例は、「…とあり」に引用される言葉が手紙等の筆記面に書き付けられている状態しか読み取れず<sup>(10)</sup>、

(10) 次のように複数の発話者を二格（場所格と解した）で標示したのも1例得られたが、珍しい。↗

方向性のある動きを表すとは考えにくい。

- (41) …, 夕暮の空をながめ入りて臥したまへるところに, 若君して奉れたまへる, はかなき紙の端に, 「あはれをもいかに知りてかなぐさめむあるや恋しき亡きや悲しき おぼつかなきこそ心憂けれ」とあれば, ほほ笑みて, … (源氏・夕霧・4-446)
- (42) 空の色したる唐の紙に, 「わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど いつも時雨は」とあり。(源氏・葵・2-57)
- (43) 今日奉るべき狩の御装束に, 寄る波にたちかさねたる旅衣しほどけしとや人のいとはむ とあるを御覧じつけて, 騒がしけれど, … (源氏・明石・2-269)
- (44) …, この御文に, 「うとうとしく思きこえず, みづから何事も聞えよ」とあり, 「身を代へたるとさへ思ひなせ」とあるは, さるべきやうこそはあらめ。(浜松・三・270)

大木 (1981:77-78) では, 書記内容を引用する「…とあり」は動作・状態の両面を持ち, 現代語訳においては「書いてある」とするのが良いとされるが, 以上の状況から見て, 手紙等の書面が送り主から受け手まで移動することを表す「…とあり」と, 筆記面における文字の存在 (つまり状態) を表す「…とあり」の2種を認め, 異なる意味の用法として区別することが必要と考える。このうち, 前者は後世にかけて衰退したようで, 現代語の「…とある」では同様の形がやや作りにくい。

- (45) ?手紙で太郎から「明日10時, 例の場所にて」とある。

後者は現代語の「…とある」に引き継がれたようだが, 現代語では筆記時現在における状況や書き手の態度を描写する (46) のような言い方だけで

ㄨ (i) 泉川, 水まさりたり。いかになど言ふほどに, 「宇治より舟の上手具してまるれり」と言ふに, 「わづらはし, 例のやうにて, ふと渡りなむ」と, 男がたには定むるを, 女がたに, 「なほ舟にてを」とあれば, さらばとて, みな乗りて, はるばると下るこち, いと労あり。(蜻蛉・中・261)

なく、(47) (48) のように、筆記時と無関係の内容の文字列が何でも引用されうる。

(46) メモ用紙に「夕食は冷蔵庫にあります」とある。

(47) 名刺に、「〇〇大学助教」とある。

(48) 紙に、幼児のたどたどしい字で「あいうえお」とある。

発言内容を引用する②に関しては、主格以外の格成分が殆ど共起しない<sup>(11)</sup>。発話主体の自己完結する動きを描写するものと見られる。以上の状況から見ると、③に分類した用例の中で起点格名詞や着点格名詞が共起した次のような用例は、①に入れるべきなのかもしれない。

(49) [正頼に対し参内を求める勅使が来たので] 蔵人の少将の君 [=正頼の十男近澄] を、左衛門督の君 [=正頼の長男忠澄]、  
「なほ、参りて、物の気色も案内せよ。ここに [=父正頼に対し]、『参り給へ』とありつる、疑ひあり [=参内を求める理由が分からない]」とて参らせ給へば、あれか人かにもあらで参り給ふ。(宇津・国譲下・782)

### 3.4 メリの後接

1節で触れたように、「…とあり」は、語り手本人の言葉の引用には使えないとされており、本稿の調査においてもその点は基本的に認められる<sup>(12)</sup>。これは、語り手が他人の様子を描写する表現に特化しているとい

(11) ヨリ格名詞の共起した用例がわずかに見られるが、これも発話主体を標示するものであるから、主格と連続的である。

(i) 御車三つばかりにて、忍びやかに急ぎ出でたまふけはひを聞くも、静心なければ、宮の御前より「参りたまへ」とあれど、寝たるやうにて動きもしたまはず。(源氏・少女・3-58)

(12) 次の例は例外かと思われる。これらは自分自身を客体化した表現であろう。

(i) 悪しとも善しともあらむを、いなむまじき人 [=父である倫寧] は、このごろ京にものしたまはず、[私から] 文にて、「かくてなむ [=山寺に籠っている]」とあるに、「はたよかなり。忍びやかにて、さてしばしも行はるる」とあれば、いと心やすし。(蜻蛉・中・240)

(ii) …、この童の「[宮が私を] いみじうさいなみつる」と言ふがをかしうノ

うことである。では、語り手はどのように他人の様子を捉えるのか。ここで表3に立ち戻ってみると、推定の助動詞の後接状況が示唆を与える。すなわち、メリは「…とあり」に後接しやすい(16例)のに対し、ナリ(伝聞)はやや後接しにくい(3例)のである。

(50) …, [北の方が] 錠ささむとすれば, [姫君は]「いかで『あなたに侍りし箱とりて』とあこぎに告げはべらむ」と言へば, たてさして, 「あの櫛の箱得むとあめり」とのたまへば, [あこぎは]まどひ持て来て, さし入る手に入れたれば, 引き隠して立ちぬ。(落窪・二・119)

(51) 御国譲りのこと, この月になりぬるを, のたまふやうは, 『同じ日, 春宮も定めさせむ』となむあめる。(宇津・国譲下・745)

これらの「…とあり」は発話内容を引用するものと解されるが、それに付いたメリは「…とあり」が視覚によって捉えられる行為であることを意味しよう。この点に着目すると、「…とあり」は、引用内容の言葉を発しているような様子が、態度・表情といった目に見えるところに表れているという事柄を意味するのだと考えられる。

表5では、メリが後接した「…とあり」の用例数を2節での意味分類に即して示した。

手紙や和歌は文字という視覚情報であるから、その内容を引く「…とあり」にメリが後接しやすいのは当然としても、発言を表すと解される「…とあり」もメリの後接が優勢であるという点は注目に値しよう。

表5 「…とあり」に後接する推定の助動詞

	① 書記内容 (手紙・和歌)	② 発言内容	③ 書記内容か発言内容かが曖昧なもの	⑦ 思考内容
メリ	4	7	5	
ナリ (伝聞)		2		1

ㄨ て、端に、「霜の上に朝日さすめり今ははやうちとけにたる気色見せなむ [童が] いみじうわびはべるなり」とあり。(和泉・59)

#### 4. 考 察

以上に見た諸現象をどのように整理して理解すべきか。本節ではこの点について試案を示したい。

まず、3.2 で見たように、「…とあり」はテ形が無く、引用句「…と」と「あり」の間に介在できる要素が基本的に係助詞・副助詞に限られる。これは形容詞等の補助活用を形成する「あり」の持つ統語的な振る舞いと同一であり、事物の存在等を表す自立語の「あり」において起きる現象とは考えにくい。「あり」は補助活用を作るに過ぎないものと見られるのだが、こう考えることで、本稿で見た以下の4点の現象も問題なく把握できる。

1つ目は、「…とあり」は書かれた文字の存在を表す用例だけでなく、手紙の移動や口頭での発言といった動作を表す用例が一定量あるという点である。「…とあり」の「あり」が存在を表す自立語の「あり」に由来するものと見た場合、動作を表すようになる経緯を想定しなければならないが、そのような派生が本当に起こりうるかには疑問がある。引用句「…と」も補助活用の「あり」も、もともと動作や状態といった意味特徴を持たなかったがゆえに、文字の存在や口頭での発言といった異質な事柄をそれぞれ含意として持つことができ、やがてそれらの意味を徐々に語彙の意味として固着させたのではないだろうか。

2つ目は、書かれた文字を引用する「…とあり」において、共起する主格名詞は人物を表すものばかりであるという点である。「あり」を自立語の「あり」の一用法と見て、文字の存在を意味すると解するのならば、主格成分には文字を表す名詞が現れることが期待される。しかし、実際にはそうはならないのである。「あり」の表す事柄の主体というよりも、誰かの言葉を引く引用句「…と」の表す事態の主体（つまり言葉を発する人物）が主格名詞として表れている、と解すべきだろう。

3つ目は、発言内容を引用する「…とあり」に対して、主格名詞以外の

成分が殆ど共起しないという点である。自立語の「あり」や「言ふ」「書く」等の引用動詞は主格以外にも場所格名詞や様々な連用修飾成分と共起しうが、「…とあり」における「あり」を、これらの変容したもの、ないしは代用として現れたものであると見る場合、主格名詞以外の格成分が共起しないことについての説明を付けるのは難しい。

4つ目は、「…とあり」に対してナリ（伝聞）よりもメリの方が多く後接するという点である。もし「あり」が別の動詞の代用として使われているのだとすると、発言内容を引用する「…とあり」は「…と言ふ」などの代用形といったことになるのだろうが、その場合にはナリ（伝聞）の後接例がもっと多く出て良いのではないか。メリの方が多く出るのは、引用句「…と」が主体の外側（態度・表情など）を描写する性質を持つからではないかと思われる<sup>(13)</sup>。

さて、ここまでは共時的な文法現象の記述に重点を置いてきたが、各用法の間の派生関係についても一応の見通しを述べておきたい。

おそらく、「…とあり」の本来的な用法は発言内容を引用する②である。用例の量は書記内容を引用する①が最も多いが、②は、少数例ながら見られた他のいくつかの用法を派生させる素地と見ることが可能な点で、原初的な姿を留めている可能性が高い。すなわち、呼称を引用する④、噂や一般論を引用する⑤は一種の発言を表すと解せるし、作品の一節を引用する⑥も、読者一般が知っていて口にする言葉を引くと解せばやはり②に近い。思考内容を引用する⑦も、言葉を口に出すという意味合いが薄れて、主体の意図の描写に重点が置かれて生じたものではないか。

①は様々な格成分、連用修飾成分と共起するところから見て、かなり具体的な行為・状態を描写する用法だと言える。その点では、自立語の「あり」と関係するもののように思えてくるが、上述の通り、「…とあり」は補助活用を形成する「あり」によって生じた形式と考えられる。となる

---

(13) 「…と」が事態の外側描写に用いられることは拙稿（2018, 2022 予定）において論じた。

と、格成分などとの共起が起こる①が本来的な用法であるとは考えにくい。①もやはり②から生じた用法ではないだろうか。②の「…とあり」は発言の物理的なあり様を描写する格成分や副詞成分と共起しない点から考えて、発言という行為をはっきりとは表さず、“発言しているような様子”を表すと見られるが、発言の代わりに行われる手紙等の書記行為も、見ようによっては“発言しているような様子”の一つのあり方と捉えることはできよう。

## 5. まとめ

本稿では中古語の「…とあり」の用例を意味的観点から①～⑦の7つに分け、それぞれの文法的な性格を観察した。その結果を踏まえて①～⑦のそれぞれを改めて示せば、次のようになる。

- ① 人物を主体として、主節時における出来事やその人物の態度を、書かれた言葉として「…と」に引用するもの。引用内容が主体から受け手へと伝達される動作を表す用法と、引用内容が文字として文面に存在する状態を表す用法とがあり、後者は（格成分・連用修飾成分によって）文字の物理的なあり様が描写される。
- ② 人物を主体として、「…と」に引用される言葉を発するような態度・表情がその人物に見て取れることを表すもの。発話という物理的動作を描写するわけではないので、発話が行われる場所や方向を示す格成分、あるいは発話の仕方を表す連用修飾成分は共起しない。
- ③ ②の中で、文脈上①の解釈を排除できないもの。
- ④ 人名・職名を引用するもの。
- ⑤ 噂などの形で一般に言われていることを引用するもの。
- ⑥ 古典などの文句を引用するもの。読者一般に知られた作中の文句を提示する。
- ⑦ 思考内容を引用するもの。

用例数は①が最も多いが、やや曖昧な意味を持つ②が本来の用法で、そこから他のものが派生したと考えるのが自然だろう。「…とあり」の「あり」は自立語の「あり」とは異なり、テ形が存在せず、引用句「…と」との間には副助詞・係助詞以外の要素の介在が許されないことから、形容詞等の補助用言を作るものと同質と考えられる。「…とあり」のテ形はトテが担うものと思われる。

本稿で見た通り、「…とあり」は中古語の和文作品に散見される形であり、現代語の「…とある」とはかなり異なる性格を持った興味深い形式である。しかし、従来の研究では殆ど注目されることがなかった。本稿における記述結果、およびそれに対する解釈の一案について、諸賢のご批評を乞いたい。

依拠テキスト（用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を [ ] に示した。）

竹取物語・伊勢物語・平中物語・土佐日記・落窪物語・蜻蛉日記・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・堤中納言物語……新編日本古典文学全集／宇津保物語……室城秀之他（1999）『うつほ物語の総合研究本文編』勉誠出版／夜の寝覚・浜松中納言物語・栄花物語……日本古典文学大系※用例検索には次のデータベースを利用した。

- ・国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』<https://base3.nijl.ac.jp/>
- ・国立国語研究所『日本語歴史コーパス』バージョン 2015.3 <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>

## 参考文献

- 大木正義（1975）「「とあり」小考－伊勢物語、大和物語での使用状況をめぐって－」『解釈』21-9 pp.19-24
- 大木正義（1981）「馬淵和夫博士退官記念国語学論集刊行会編『馬淵和夫博士退官記念 国語学論集』大修館書店 pp.75-96
- 春日和男（1968）『存在詞に関する研究』風間書店
- 辻本桜介（2017）「文相当句を受けるトナリについて－中古語を中心として－」

- 『ことばとくらし』 29 pp.3-19 (新潟県ことばの会)
- 辻本桜介 (2018) 「中古語の「～となし(無し)」について－体言・動詞終止形を受ける場合を中心として－」『米子工業高等専門学校研究報告』 53 pp.10-27
- 辻本桜介 (2022 予定) 「中古語における引用句「…と」の特殊用法」中部日本・日本語学研究会編『中部日本・日本語学論集』和泉書院
- 時枝誠記 (1954) 『日本文法 文語篇』岩波書店
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 伴久美 (1960) 「かげろふ日記の解釈と文法上の問題点」文入宗義編『講座 解釈と文法 4』明治書院
- 山口堯二 (2000) 『構文史論考』和泉書院

【付記】本稿は、令和2年度 JSPS 科研費（課題番号：19K13210）による研究成果の一部である。

(つじもと おうすけ・関西学院大学文学部助教)